

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月17日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2012

課題番号：22653126

研究課題名（和文） 選択性緘黙の内的世界の探究と治療教育的アプローチの開発

研究課題名（英文） Exploration of inner world of person with selective mutism and development of remedial approach

研究代表者

園山 繁樹 (SONOYAMA SHIGEKI)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：90226720

研究成果の概要（和文）：家庭では会話ができるにもかかわらず、学校等で話せなくなる選択性緘黙については、いまだわかっていないことが多い。本研究では質問紙調査と事例研究を行い、以下の成果を得た。a) 選択性緘黙の状況は個人差が大きく多様である。b) 小学校低学年以下の子どもには、教師・親・コンサルタントによる協働的アプローチが有効である。c) 小学校高学年以降では、本人の自発性を強化するアプローチの有効性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：We do not know very little about a person with selective mutism who is failure to speak at school despite speaking at home. We conducted a questionnaire and case studies and obtained the following outcomes; a) the condition of selective mutism varies greatly among individuals, b) for the child in lower elementary grade, the collaborative approach by teacher, parent and consultant has been valid, c) for the child in upper elementary grade and high school, the effectiveness of the approach to enhance the spontaneity of the child has been suggested.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	0	1,200,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	450,000	3,150,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、特別支援教育

キーワード：選択性緘黙、情緒障害、特別支援教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 家庭で家族が相手であれば自由に会話が可能であるにもかかわらず、学校や幼稚園など話すことが期待される社会的場面で話せなくなる選択性緘黙については、従来より刺激フェイディング法などの行動療法の有効性が示唆されている。しかし、これらの方法は年少児童には有効であるが、中学生以上

の年長児や青年期の選択性緘黙に有効な治療教育的アプローチはいまだ定式化されていない。

(2) 選択性緘黙は個人差が大きく、どのようなきっかけや経過があるのか、あるいは本人がどのように受け止め、どのように改善の努力をしようとしたのかについての研究は

少ない。これらの情報が得られれば、治療的アプローチの開発につながると考えられる。

2. 研究の目的

(1) 選択性緘黙の個人差と本人自身の捉えや対処法について質問紙調査し、その内的世界のあり方を検討するとともに、治療的アプローチの開発につなげる。

(2) 年少児から青年期までの選択性緘黙の事例に対して支援し、その効果を事例的に検討し、年齢等の要因に対応した治療的アプローチを開発する。

3. 研究の方法

(1) 質問紙調査

①調査対象者：選択性緘黙の経験者と保護者を中心とする任意団体に属する緘黙経験者48名を対象とし、22名から回答が得られた(回収率45.8%)。回答者の内訳は、男性5名、女性17名、平均年齢32.9歳(範囲：20～47歳)であった。

②調査項目：基本属性、選択性緘黙の状況、受け止め方、対処の仕方、選択性緘黙の改善に影響を与えた経験・エピソード、学校(園)での状況、支援、家族の対応、現在の状況、社会的場面での苦勞の程度から構成され、それぞれ下位項目を設定して、選択式または自由記述による回答を求めた。

(2) 事例研究

代表的な事例は以下の2事例であった。

①小学生男子の事例

・対象児童：支援開始時(X年9月)、小学校1年の男児(A児)。入学式で「ハイ」と返事した以外は、学校で全く話さない。家庭では普通に会話ができ、近所の2～3人の同級生とは普通に会話し遊んでいる。幼稚園時も同様。休憩時には話さないが他児と遊び、学業成績に特に問題はない。

・コンサルティ：学級担任(T)、母親(M)、特別支援教育コーディネーター(Co)。

・コンサルタント：大学教員(研究代表者)。

・コンサルテーションの基本的枠組み：大学教育相談室の活動として実施した。校長の承諾の下、担任と母親とコーディネーターが1～2か月に1回大学に来談し、学校でのA児の発話状況や実施した支援の結果をコンサルタントに口頭・書面記録により報告し、以後の支援手続きを協議し、それらを学校と家庭で実施した。支援開始時には、刺激フェイディング法を基本に、学校・家庭・専門機関が協働して支援を行う方法を紹介した翻訳書(McHolm, A. E. et al. (2005) *Helping Your Child with Selective Mutism*. 河井・吉原訳(2007)「場面緘黙児への支援」田研出版)をTとMに読んでもらった。

・支援手続き：各Stepの主な手続きは以下

の通り。新たに導入する手続きについては、原則としてMが家庭でA児に説明し、A児が同意したものを導入した。

・Step 1 (X年9～11月)：発話状況・友達関係・不安度等のアセスメント情報を収集し、スモールステップで発話できる状況を増やしていくことをコンサルタントより説明し、学校・家庭で実施可能な手続きについて協議した。教室の席を、家庭で話せる子と隣席にした。挙手→指名→指で答えを示したり、Tが代読することとし、そのことをMがA児に伝えた。

・Step 2 (X年12月～X+1年1月)：Tが家庭訪問し、M同席でA児が本読みをする。健康調べにグー(拳)で答える。

Step 3 (X+1年2～3月)：放課後の教室でT、M、A児で遊びながら会話をする。

・Step 4 (X+1年4～5月)：2年生になり、クラスは同じで、TとCoが代わった。国語の音読テストを仲のよい他児2人と一緒に廊下でする。家庭でMと「ハイ元気です」の練習をする。

・Step 5 (X+1/6～9)：健康調べで「ハイ元気です」と言う。

・Step 6 (X+1/10～X+2/3)：トークンエコノミー法(Tが「がんばり表」を作成し、各場面〔健康調べ、係り、国語、算数、その他〕で基準としたレベルの大きさの声が出たらシールを貼り、5枚ごとに好みのシールと交換する)。

②高校生女子の事例

・対象生徒：支援開始時、高校3年女子。小学校5年時のトラブルを契機に、小学校6年時より徐々に学校で話せなくなった。本研究開始時、学校においては心身の緊張が高く発話抑制の他にも行動抑制があった。教育相談場面でも発話・行動の抑制はあったが、小さな声で研究代表者らに挨拶はできた。

・支援者：大学院生がMT・ST各1名となった。研究代表者は支援の企画とスーパーバイズを行った。

・指導場面と期間：原則として週1回60～90分の教育相談個別指導場面、及び月に1～4回のMTと対象生徒で決めた地域生活場面(映画館、科学館、夏祭りなど)。本支援はX年5月～10月まで行った。

・アセスメント：McHolmら(2005)を参考に作成した不安得点チェック表及び発話状態を用い、大学教育相談場面、校地域生活における緘黙の状態を把握した。また、支援計画作成のため、対象生徒のニーズや好みの活動を書面にて回答もらった。

・支援方法：大学教育相談場面では、対象生徒のニーズを取り入れ「大きな声で話すトレーニング」を行った。対象者が負担なく話すことができる本の音読(約20分間：MT、STと交互に読む)で音量(dB)を音量計で

測定し、その値をフィードバックし、声量の増大を言語賞賛した。また、地域生活場面においては対象生徒の好みや意見を取り入れ、MTやSTと一緒に活動を行う活動を決定し、対象生徒の不安が低いもから開始した。活動中、返答の必要ない呼びかけや、「ハイ」「イエ」で答えられる質問などを行った。

4. 研究成果

(1) 質問紙調査

主な結果は以下の通りであった（〔 〕は回答者数）。

①選択性緘黙の状況：選択性緘黙が発現した平均年齢は5.0歳（1.5～15歳）。発現のきっかけは「幼稚園（保育園）入園」〔13〕、「わからない」〔2〕、「高校入学」〔1〕、「いじめ」〔1〕、「ひどく怒られた」〔1〕、「友達と仲が悪くなった」〔1〕、「家庭不和」〔1〕、「きっかけはない」〔1〕。話せない理由は「不安と緊張のため」「自信がないため」が幼稚園段階から成人段階のすべてにおいて多かった。克服した年齢の平均は17.6歳（9～30歳）で、克服時期は小学生〔2〕、中学生〔3〕、高校生〔3〕、大学生・就職時期〔8〕、27歳〔1〕、30歳〔1〕であった。克服の過程は「進学や就職を機に話すことを意識した」〔7〕、「友達ができた」〔3〕、「話さざるを得ない状況になった」〔3〕、「得意な分野において周囲（先生・友人）から賞賛されたことによる自信の積み重ね」〔2〕、「実家を離れた」〔1〕、「カウンセリングを受けた」〔1〕、「特に何もしていない」〔1〕。克服の過程で重要な役割となった人は18人中9名が「いた」と回答し、「友人」〔6〕、「先生」〔2〕、「臨床心理士」〔1〕であった。一方、まだ克服できずにいる人も4名いた。

以下の②～④は複数回答であり、回答の多いものを挙げた。

②受け止め方：選択性緘黙をどうしたいと思っていたかについて、積極的な態度「話せるようになりたい」〔13〕、「どうにかしたい」〔4〕が多かった。消極的な態度を示した人の中にも、最初は積極的な態度「話したいと思いつつも、断念した」〔9〕が多かった。

③対処の仕方：克服のために「カウンセリングに通う」〔9〕、「話すことを事前に考える」〔4〕、「簡単な応答や返事をする」〔4〕、「コミュニケーションや認知行動療法に関する書籍を読む」〔4〕、「会話は出来なくとも挨拶をする」〔2〕などの試みをしていた。

④学校（園）での状況：よくない対応として、先生からの「叱責」〔10〕、「傷つく言動」〔9〕、「冷たい態度」〔7〕、「無理やり話させる」〔4〕、級友は「いじめ」〔5〕、「話しかけや誘いかけをしない」〔3〕、「話さないことを責め、無理やり話させようとする」〔3〕などの対応が挙げられた。よい対応として、先生が「気にかけてくれたり、配慮してくれた」〔14〕、「よ

い面を評価してくれた」〔10〕、「無理に話させようとしなかった」〔10〕、級友に「仲のよい友達があった」〔15〕、「普通に接してくれる人がいた」〔5〕、「助けてくれる人がいた」〔4〕が挙げられた。

⑤現在の状況と社会的場面の苦勞：現在の状態によって、「必要な場面である程度話せるようになった群」〔10〕、「必要な場面である程度話せるようになったが、話せないときがある群」〔8〕、「まだ必要な場面で話せない群」〔4〕に分けられた。社会的場面での苦勞の程度は、緘黙が発現した時期に高くなり、緘黙の間は高い状態が継続し、緘黙の克服を機に低くなることが共通して見られた。また、一度克服できた後も、就職や結婚等の環境変化によって苦勞の程度が高くなる人がいた。

○まとめ

本質問紙調査では、選択性緘黙の多くの人が「話せるようになりたい」と思っていることが明らかになり、また、克服するための努力をしていることが明らかになった。緘黙の克服には、環境の変化等のきっかけを要する場が多いが、教師や友人からの適切な働きかけがあれば、環境の変化が伴わなくても克服可能な場合があることが示唆された。また、緘黙発現から克服までに10～15年を要する場が多いことから、早期発見と早期対応の重要性が改めて示された。学校（園）では、理解のない対応をされた場合が多く、教師や級友に対して、選択性緘黙の理解を浸透させる必要がある。教師に対しては、受容的な優しい態度で、対象児の良い面を評価するなどの自尊心を向上させるような対応が求められ、級友に対しては、対象児が話せなくても積極的な働きかけを行うことが求められることが示唆された。また、克服後も社会的な場面で苦勞する人が少なくなく、成人後も克服できずにいる人がいることから、成人期の支援方法の構築が求められる。

(2) 事例研究

①小学生男子の事例

各Stepについて以下のように発話状況の拡大が徐々に見られ、最終的には学校の全ての場面でほぼ通常の発話が可能となった。

・Step 1：席が近くの子に話しかけられて笑顔でうなづく。日直は他児と一緒に口を動かした。全員一緒に答える時に「はい」と小声で言った。授業で指名され、黒板に答えを書いたり、ノートに書いた答えをTが代読することが増えた。グループ内で「ごちそうさまでした」と毎日小声で言えた。休憩時の遊び中に「キャー」「ワー」等の発声が増えた。

・Step 2：Tが家庭訪問し、M同席でA児が教科書（2～4ページ）を読み、Tに「ありがとうございます」「さよなら」と言えた。健康調べでニコニコしながらグーで答えた。

・Step 3：放課後の教室で、Tの前で本読みができた（Mは同席→廊下）。廊下等でグループの他児に小声で話す。

・Step 4：4 月中は発話は少なかったが、5 月に入ってリラックスした様子になる。家庭訪問ではTに「こんにちは」と挨拶できた。国語の音読テストを仲のよい他児2人と一緒に廊下で、最初の2行を一緒に声を出して読んだ。教室内で声を出して笑うことが増えた。

・Step 5：放課後の教室で、M同席で、Tとゲームをしながら会話ができるようになった。7 月になって「ハイ元気です」と言えるようになった。

・Step 6：「がんばり表」では、健康調べの口頭での答えはクラス全員に聞こえる声でできるようになり、係りの発表は前列に聞こえる程度の声で可能となった。国語と算数では週に1・2度は近くの子に聞こえる声での応答ができるようになった。音読テストは教室内で一人で立って読むことはできなかったが、他児と2人で一緒に読むことはできた。12 月には給食中にグループの他児と笑顔で会話するようになった。他児とトラブルがあったときに、Tにきちんと説明できるようになった。休憩時間に親しい子と普通に会話するようになった。授業中に他児と話していてTに注意されることもあった。

○まとめ

約1年半のコンサルテーションにより、授業中の発話が可能となり、また授業参加への程度は高く、A児も楽しく学校生活を送ることができるようになった。係りでの発表や健康調べへの応答もほぼ通常の大きさの声で可能となった。休憩時間における他児との会話は、すべての同級生ではないものの多くの子と会話が可能となっている。特に、本支援の実施については、MからA児に説明し同意を得られたものを導入することで、A児にとっても負担の少ないものとなった。また教室での様子をA児がMに話すことも多く、学級でTが観察したことと付き合わせることで、適切な支援レベルを調整することが可能であった。

②高校生女子の事例

本の音読では、Fig.1 に示したように、声量の増大が見られ、当初より10dB程度大きくなり、MT や ST にも声がよく聞こえるようになった。対象生徒自身からも、音読トレーニングを通して、声が出しやすくなっていることや、声が小さきは徐々に大きさをコントロールできることが報告された。このトレーニングを通して対象者は、家庭以外の場面一つである大学において声の大きさを自分で操作ようになった。大学教育相談場面と地域生活の両方において、発話や活動に対する不安得点が低減し、MT や ST に対する返答数も増加した。しかし、対象生徒の発話数

はまだ少なく、話す声も小さかった。

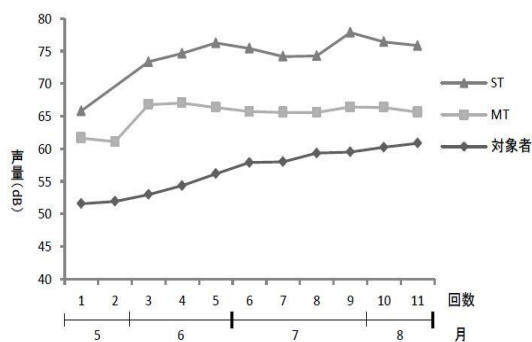


Fig.1 音読時の声量の推移

○まとめ

本アプローチでもっとも効果的であったのは、音読の声量フィードバックによるオペラント強化であった。これは対象生徒が希望した活動で、かつ、結果（声量の変化）がすぐにわかることから、声量を大きくしようとする努力が生まれやすかった。一方、地域社会での活動場面においては計画通りに行かないこともあり、対象生徒の予測と異なることが起きると不安が高くなる場合もあり、より計画的に進めていく必要があった。

(3) 総括

質問紙調査、事例研究、並びに、文献研究を通して、総合的に以下のことが指摘できる。

①選択性緘黙に関する新しい知見

・選択性緘黙が発現するきっかけは幼稚園・小学校の入学が多いが、それ以後も友人とのトラブルやいじめなどが発現のきっかけになることがあり、中学生や高校生になってから発現する「中途発現」の場合もある。

・選択性緘黙のある人は何とか話したいと思っていることが多いが、それに対して適切な支援が受けられていないことが多い。

・予後については、「必要な場面である程度話せるようになった群」「必要な場面である程度話せるようになったが、話せないときがある群」「まだ必要な場面で話せない群」の3群に大別でき、また、話せるようになっても対人場面で不安・緊張が高くなる社交不安障害に近い症状を訴える人もいる。

②選択性緘黙のある人の内的世界についての推論

質問紙調査と事例研究の成果から、現段階では以下のように推論することができる。

新しい集団場面での生活開始や対人的トラブルにより高不安・緊張が生じ、そのために本人が気づかない間に発話の抑制が生じ、それが維持されていく。小学校中・高学年行こうになると、「学校では話さない自分」という自己像が確立されていき、その自己像への固執がつよくなり、話さない状態がより強

固にされる。一方、「話したい」という動機は維持され、高校生年齢以降は何とか話せるようになりたいと様々な試みがなされるが、その都度適切な支援が得られないと上手く行かない場合も少なくない。一方で、何かを契機に「話す」と決断することで徐々に話せるようになる場合もある。ただし、これらのことはまだ推論レベルの記述であり、今後、各事例の生活歴を調査することにより、根拠となる情報を増やす必要がある。

③治療的アプローチの在り方

質問紙調査と事例研究の成果から、現段階では以下のように提言することができる。

・年齢に応じた内的世界に対応したアプローチ：小学校低学年以下の場合には、刺激フェイディング法を基本として、家庭など本人が安心して話せる場面からアプローチをはじめ、徐々に話せる人や場を増やしていき、学校場面に近づけるというスモールステップのアプローチが有効であると思われる。小学校中・高学年以降は自意識の高まりと、「学校で話さない」自己像の確立から、本人自身の何とか話したいという動機づけを育てることが重要であり、本人の不安感を適切に査定し、本人が取り組んでみたいと希望した活動を取り入れつつ、発話を強化していく。

・学校で必ず取り組むこと：学校場面でも不安・緊張が高いことが多く、まずはその不安・緊張を和らげ、安心して学校生活ができるようにすることが必須である。例えば、以下で述べるように発話以外のコミュニケーション手段を用いて、授業参加を高めることが挙げられる（答えがわかったら挙手する、答えを板書する、答えを代読するなど）。保護者や専門家と協力関係を築き、学校以外の場面での状況を把握しつつ、可能であれば刺激フェイディング法を基本としたアプローチを行う。

・発話以外のコミュニケーション手段（AAC）の活用：選択性緘黙のある人は特定の場面で発話が抑制されることが主症状であるが、発話以外のコミュニケーション手段は可能であることが多い。まずは本人が安心して生活できるように、本人が可能なコミュニケーション手段を積極的に活用する必要がある。

・教員や保護者等の関係者への情報提供：選択性緘黙は学校でも見逃されやすく、家庭では話せることから保護者にも理解が難しい。早期発見・早期対応をしていくためには、教員に対する正しい理解の仕方を周知し、保護者には協働して対応できるような支援と情報提供が不可欠である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計3件）

①奥村真衣子・園山繁樹、選択性緘黙のある高校生に対する本人参画型支援アプローチの検討日本特殊教育学会第50回大会2012年09月29日、つくば国際会議場（茨城県）

②園山繁樹、選択性緘黙を示す小学生の担任・母親・特別支援教育コーディネーターへのコンサルテーション、日本特殊教育学会第49回大会、2011年9月23日、弘前大学（青森県）

③奥村真衣子・園山繁樹、選択性緘黙経験者における症状のとりえと対処に関する検討、日本特殊教育学会第48回大会、2010年9月20日、長崎大学（長崎県）

〔図書〕（計1件）

①園山繁樹、AAC、PECS、金子書房、発達障害学会編、発達障害支援ハンドブック、2012年、122～123

〔その他〕

ホームページ等

①本研究課題の研究成果と関連情報を「園山研究室選択性緘黙 HP」に掲載した。

<http://www.human.tsukuba.ac.jp/~kanmoku/index.htm>

6. 研究組織

(1)研究代表者

園山 繁樹 (SONOYAMA SHIGEKI)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：90226720